

大学と附属学校の連携による体系的な養護実習プログラムの構築

- ◎荒川雅子（東京学芸大学養護教育講座）
 - 田岡朋子（東京学芸大学附属竹早小学校養護教諭）
 - 佐藤牧子（東京学芸大学附属小金井小学校養護教諭）
 - 竹鼻ゆかり（東京学芸大学養護教育講座）
 - 塚越潤（東京学芸大学附属竹早中学校養護教諭）
 - 倉澤順子（東京学芸大学附属大泉小学校養護教諭）
 - 岡庭萌（東京学芸大学附属国際中等教育学校養護教諭）
 - 斉藤陽香（東京学芸大学附属国際中等教育学校養護教諭）
 - 大関智子（東京学芸大学特別支援学校養護教諭）
 - 中村陽子（東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎養護教諭）
 - 中谷千恵子（東京学芸大学附属小金井中学校養護教諭）
 - 丸田文子（東京学芸大学附属世田谷小学校養護教諭）
 - 遠藤真紀子（東京学芸大学附属世田谷中学校養護教諭）
- 代表者連絡先：arakawan@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 養護実習プログラム、連携、養護実習日誌

1. はじめに

本大学においては、2010年度入学生から、教育実習関連科目により「大学での学び」と、「学校現場での学び」の往還により、教員としての実践力を身につけるためのカリキュラムが適用され、教育実習のあり方や位置づけも変更された。そのため、養護教育教員養成課程において、養護実習を含めたカリキュラムの具体的内容を、大学と附属学校双方が連携する中で再構築していく必要がある。そこで、「養護実習を含めた養護教諭養成のためのカリキュラムを、附属校との連携により再検討すること」を目的として、本研究を行った。

2. 本プロジェクトの実施

(1) 学生並びに附属養護教諭の意識調査

1) 研究方法

学生（養護教育教員養成課程3年生11名）及び、附属養護教諭（11名）の意識調査をもとに、養護実習日誌の改定を行った。意識調査はいずれも質問紙調査により、学生には養護実習開始前（2016年8月）及び終了後（2016年9月）、附属養護教諭には養護実習終了後（2017年1月）に実施した。内容は、学生には実習前後の気持ち、実習に対するイメージの変化、実習が自分自身にとってどのような学びとなったか等、附属養護教諭には、実習受け入れ状況、基礎実習で学生に身に付けさせたい力、基礎実習の実習内容、大学への要望、実習の養護教諭への影響等である。分析は、いずれも逐語録をカテゴリーごとにまとめた。

2) 結果

①養護実習前後の学生の意識調査

学生の意識調査については、養護実習前後の意識の変化として表1のようにまとめた。

表1 養護実習前後の学生の意識の変化

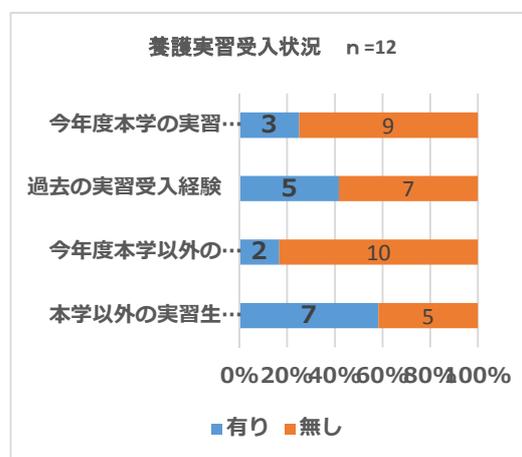
	実習前	実習後
気持ちやイメージ	不安、自信のなさ等、ネガティブな思い	大変さを実感しつつ、充実感や達成感を感じた
実習で学びたいことや実際の学び	救急処置、保健指導等の養護教諭の執務	子供の見方、対応の仕方等、学校組織や教員という立場を学ぶ機会

②附属学校養護教諭の意識調査

附属学校養護教諭の意識調査は、養護実習受入状況並びに実習で身に付けさせたいと感じている力について、図1及び表2のようにまとめた。

表2 実習で身に付けさせたい力

養護教諭として	人として
養護教諭の役割・専門性、教育観・養護観、基礎知識	コミュニケーション能力、実践力、判断力、プレゼン力
学校組織・連携、児童生徒観察能力等	課題発見力、コーディネート能力、マネジメント能力 等



(2) 養護実習日誌の改定及び検証

1) 実施方法

①養護実習日誌改定

養護実習日誌の改定は、意識調査の結果に加え、①現代の養護教諭に求められる職務や専門性を体系的に学べる構成とする。②学校教育や子どもの健康についての現代的な課題をトピックスとして取り上げる。③実習生が記録を通して自らの学びの課題を省察できる構成とする。の3点に留意し、以下の項目を加え、2016年1月～3月に作成した。作成した養護実習日誌は2017年度の実習より使用した。

表3 養護実習日誌記載項目

①実習項目、②学校保健計画、③保健室経営計画、④救急処置・外科の記録、⑤救急処置・内科の記録、⑥保健指導（集団）計画・指導案、⑦保健指導（個別）記録、⑧健康診断活動内容、⑨児童生徒保健委員会活動計画、⑩1日保健室経営計画・記録

②改定後養護実習日誌の検証

改定前養護実習日誌と改定後養護実習日誌の両方を使用した、4年生10名について、グループインタビューを行った。実施は、2017年6月と7月の2回に分けて実施し、養護実習日誌について自

由に語ってもらった。インタビュー内容は録音し、逐語録をカテゴリーごとに分類した。

結果としては、①記述する量が多くなり、負担に感じたことや、②学校保健計画や保健室経営計画など、実習校が作成していないために、参考にできるものがなく、苦勞したこと、③チーム学校やインクルーシブ教育、ヘルスプロモーションの視点等、事前に復習せず、また実習校でもそうした言葉が出なかったため、何を書いてよいかわからなかった、④PCの使用や、ファイリングについて事前に説明していたにもかかわらず、十分に伝わっていなかったため、実習中にどう対応してよいかわからず、困ったこと、などが挙げられた。

これらの改善点を活かして、養護実習日誌を十分に活用するためには、事前指導で丁寧に繰り返す指導を行う必要性が明らかになった。

(3) 養護実習指導内容調査

1) 実施方法

2017年度に本校の養護実習での指導を担当した附属小・中学校5校の養護教諭に、養護実習の指導内容について、予定及び実際に行った指導内容についてワークシートに記入してもらい、5校の集計を行った。(調査月日：2017年9月～10月)

指導内容は主にA講話、B保健室(経営)、C保健教育、D学級(活動)、E授業観察、Fその他に分類し、1日のうち何時間をその活動に割いたかおおよその時間(割)で記入してもらった。養護実習期間の3週間分のうち、1～5は第一週の月～金曜日、6～10は第二週の月～金曜日、11～15は第三週の月～金曜日として記入し、祝日が含まれた学校は、翌週の實習日を16、17の欄に記入した。

それぞれの項目で、合計5～10時間未満、10時間以上についてセルに着色し、その分布を明らかにした。

2) 結果

本校附属学校による養護実習の指導内容は、表4のような分布であることが明らかになった。

表4 養護実習指導内容

日	曜日	A 講話		B 保健室(経営)		C 保健教育		D 学級(活動)		E 授業観察		F その他		時間合計	
		予定	実際	予定	実際	予定	実際	予定	実際	予定	実際	予定	実際	予定	実際
1 週	1 月	5	10	8	7	1	0	5.5	5.5	9	9	1	1	29.5	32.5
	2 火	6	6	10	5	3	1	3.5	3.5	7	5	3	4	32.5	24.5
	3 水	2	2	8.2	5.2	3	2	4.3	3.3	13	11	2	2	32.5	25.5
	4 木	3	2	8.5	8	3	3	5	2.5	8	3	5	7	32.5	25.5
	5 金	2	1.5	13	10	2.5	2	6	5	6	4	3	3	32.5	25.5
2 週	6 月	0	0	9	7.5	6	5.5	4.5	3.5	6	6	7	4	32.5	26.5
	7 火	0	0	11.5	10	5	5	4	2.5	2	1	10	7	32.5	25.5
	8 水	2	2	4.2	4.2	6.5	5.5	4.8	2.8	9	8	6	3	32.5	25.5
	9 木	0	0	13	9.5	2.5	3	5	4	3	1	9	8	32.5	25.5
	10 金	0	0	6	9	7	4	3	1	1	1	7.5	5.5	24.5	20.5
3 週	11 月	0	0	14	10	3.5	0.5	4	2	0	0	3	0	24.5	12.5
	12 火	0	0	19	19	1	0	1.5	2.5	1	0	10	1	32.5	22.5
	13 水	0	0	19	15	0	2	1.5	2.5	8	5	4	2	32.5	26.5
	14 木	0	0	12	13.5	4	4	8.5	4	2	0	6	3	32.5	24.5
	15 金	1	1	6	6	1	0	5	6	0	0	11	3	24	16
	16 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	17 火	0	0	1	0	4	0	2	0	0	0	1	0	8	0

養護実習内容は、講話や授業観察など、実習の初めに集中して時間が配分されているものと、保健室(経営含む)での執務、や学級(活動)、など全体に亘って満遍なく計画・実施されている項目もあった。保健教育は後半に保健指導や保健科の授業を担当することなどが計画されている場合が多いが、全体の時間として確保されている時間は少なかった。

一週目から三週目までに徐々に、学校での活動に参画していく内容となっており、段階的に実習プログラムが組み立てられていることが明らかになった。

